

2022年1月9日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 竹内喜保

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

へブライ人への手紙 第3章 6節

讃美歌

讃美歌 21-16-1 (われらの主こそは)

交 読

詩編 第22篇 1節-22節 (p. 23)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第15章 21~32節

(新約 p. 95)

讃美歌

讃美歌 21-278-1 (暗き闇に星光り)

説 教

「十字架上の王」

2022年が始まりました。年が改まりましたもやはり毎日
入ってくるさまざまなニュースに不安を覚え、また痛みを覚え
る出来事が続くなか、いろいろに気をつかいながら歩むわたし

たちですが、それでも今朝、同じ主イエス・キリストを信じて、あるいはその信仰を求めてここに集まってきました。しかも同じところに集められるには、お一人お一人がさまざまなかたち、さまざまな導きを通してここに集められてきました。思いがけないところで人に出会い、思いがけない体験をして、そこでみ言葉に出会い、み言葉を聞き、主イエスに触れて、教会生活を始められたことと思います。そのように自分の意図とは関係なく出会ったわたしたちですが、同じように今日のマルコによる福音書でも、稀に見る信仰への経緯を辿った人の名前が出てきます。

「シモンというキレネ人」、このシモンという人がこの後どんな人生を歩んだのか、それを聖書の中から見つけることはとても難しいのですが、言い伝えによれば、後に洗礼を受けて教会員になった人だと言われています。一つの理由は、このシモンの息子たちの名前「アレクサンドロとルフォス」です。アレクサンドロは同じ名前が使徒言行録に何度か出てくるもの

の、同じ人かどうか分からないようです。ただルフォスという人については、ローマの信徒への手紙第 16 章 13 節に登場するところから、ローマの教会員だったのではないかとされます。このマルコによる福音書が、ローマで記されたのではないかとされていることもそれと関係してきます。ただどちらにしても、今日の聖書箇所において登場しているということは、マルコによる福音書がまとめられる前、イエスさまの十字架の出来事が教会で何度も語られたとき、それを聞いている人たちにとっては馴染みのある、よく知られた人物だったのではないかと考えることができます。そうだとすれば、「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が」と聞けば、ああ、あの二人のお父さんの話だね、と二人がいるところで聞いたのかもしれませんが、シモン自身がそこにいても同じように語られたのかもしれませんが。あるいはシモン自身が何度もこの時の出来事を語ったと考えても間違いではないと思います。

「キレネ」という地名ですが、今で言えば、リビアとい

う国の中にある町ですが、当時はエジプトの、アレクサンドリアという町と並んで、北アフリカでも最も多くのユダヤ人が住んだ町として知られていたようです。そうすると、シモンは、そのキレネからたまたまエルサレムに来ていたのかもしれませんが。過越しのお祭りということで訪ねて来たのかもしれませんが。

「田舎から出て来て」とありますが、この「田舎」という言葉は、今わたしたちが使っている都会と田舎という意味というよりは、畑、町の外にある場所を指します。ですから、このシモンはずいぶん朝早くから畑仕事を片付けて、ちょうどここにやって来たのではないかという想像もできます。あるいはそこまで考えなくても、郊外にいたシモンが、たまたまエルサレムの都に入って来た。そうするとイエスという人物と、他のふたりの処刑があるから見物していこうという意図があって、エルサレムにやって来たとは考えにくい。たまたま出て来て通りがかった。体格が良かったのかもしれませんが。ローマの兵士

私たちはそのシモンを捕えて「十字架を無理に担がせた」。

「十字架」とありますから、わたしたちは映画などで見る、十字に組んだ大きな柱二つを背負わされて歩いておられるイエスさまのお姿を想像しますが、実際は少し違うようです。この場合には、十字架の横木の部分だけを担がせるというのが通例だったようです。支柱になるまっすぐの縦の柱の方はすでに刑場に立てられている。だから、そこまで、横木になる一本の柱を運ばせる。それにしてもとても重いものです。しかもイエスさまは大祭司の屋敷とピラトの官邸で数々の拷問虐待を受けておられるのですから、横木一本と言えど、そうした柱を背負う体力も尽き果てておられた。運ぶ力など残っていない。そこにたまたまたシモンが出くわし、イエスさまの代りに担がされてしまいます。それはただ重いというだけではなくて、イエスさまがこの時受けておられた辱めを自分も引き受けなければならない。その意味では、体だけではなくて心においても無理やり重荷を背負わされてしまうという体験をした。けれど、こ

こはとても不思議なことです、だからと言って、このシモンは、無理やりあの恥ずべき十字架を背負わせるようなことをさせてと言って、この後、ナザレのイエスなんか自分には関係ないと腹を立てて、イエスさまを捨てたというのではなかったようです。この事を通して、おそらくペトロたちの説教に耳を傾け、やがてこの人も、洗礼を受けてイエスは主であると告白するようになる。きっとその時には、シモンにとって、あの十字架の重さをわたしは知っているのだということが、とても大きな意味を持ったことだろうと思います。実際に自分が十字架刑の判決を受けるのでもなければ、十字架の重みを知るということは、ローマの兵士でもなければ経験することはないからです。おそらく最初の頃の教会で、イエスさまの十字架とはどれだけ重いものだったかということ、きちんと説明できたのは、シモンだけだったのではないのでしょうか。そういう人が十字架の重みを知ったからイエスさまの弟子になったということは、これはすでに不思議な神さまの導きがあったと思います。しかもマルコによる福音書は、この出来事をたった一人シモン

だけが経験できた特別な事柄として理解していたとは思えない
ところがあります。

「イエスの十字架を無理に担がせた」。日本語で見ると何
ということのないように思える「担がせた」という言葉です
が、実はここで使われている言葉は、あまり一般的には使わな
い言葉だそうです。どちらかと言うと、ちょっと無理してここ
に使ったような言葉です。どうしてかと言うと、第8章34節と
のつながりで理解する人がいます。この箇所はイエスさまがご
自分の死と復活を預言なさった後で、わざわざ群衆を弟子たち
と一緒に呼び寄せて言われました。「わたしの後に従いたい者
は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさ
い」。ここに「背負って」とある言葉と、今日の「担がせる」と
いう言葉とは、本来同じ言葉です。このキレネ人シモンは、無
理に自分を捨てさせられた。自分を殺すことを、そこで求めら
れた。自分を殺さなければ、あんなにも恥ずかしい十字架を背
負って、イエスと一緒に歩くなんてことはできなかったはずで

す。そして、実際にイエスさまの後に、自分で十字架を背負ってついて行きました。同じ言葉を重ねたということは、この福音書を書いた者、そして聞いた者たちにとっては、シモンがイエスさまの言葉を実行させられた最初の人だという思いがあったはずです。自分たちもまた、キレネ人シモンの後をついていだけで。シモンが十字架を背負ってついて行ったように自分たちも。そう思ったのです。その意味では、シモンは、最初のキリストの弟子、十字架を背負って、イエスさまに従うことのできた最初の弟子になった人だと理解しました。そしてのちにシモン自身が、ここで自分が背負った十字架の重さの話を喜んでいたのでと思いますし、福音書を書いた人もまた、それを喜んで語りました。シモンの話は、どうしても書きたかった話だったのではないかと思います。

もうひとつ、この福音書がどうしても語らなければならないことがありました。24節の、「それから、兵士たちはイエスを十字架につけて」と書いた、その次の段落に注目します。

新共同訳聖書ではまるで詩からの引用であるかのように書いています。「その服を分け合った、だれが何を取るかをくじ引きで決めてから」。

実際にこれは先ほど交読した詩編の第 22 篇 19 節からの引用です。言葉が厳密に一致するわけではありませんが、同じ言葉です。そして、同じ詩編第 22 篇の 8 節と 9 節にこうあります。

わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い

唇を突き出し、頭を振る。

「主に頼んで救ってもらおうがよい。

主が愛しておられるなら 助けてくださるだろう。」

マルコによる福音書は今日の聖書箇所、29 節で「頭を振りながらイエスをののしって言った。『おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ』」、あるいは 31 節から 32 節にかけての侮辱の言葉を記した時に、

詩編の言葉をはっきりと思い起していたはずですが、詩編で歌われているとおりが、ここで起こっていると信じて書いたはずですが。

次の機会になりますが、このすぐ後、34 節には、イエスさまが大声で叫ばれた言葉、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」が記されています。これは、同じ詩編第 22 篇の最初の言葉です。十字架の出来事全体を貫くようにして、詩編の言葉が響いているとマルコは理解しましたし、当時の教会の人たちも、そう信じました。

もう一つ注目するのは、28 節。前の口語訳聖書とは違って、新共同訳聖書では 28 節が省略されました。どうしてこういう書き方になったかということ、聖書の写本によって、この 28 節を書いているものと書いていないものがあるからです。28 節は詩編からの引用ではなく、同じ旧約聖書ですがイザヤ書から

の引用です。そうすると、ここは想像ですが、マルコによる福音書を書いた人は詩編第 22 篇を念頭に置いて書いたようですが、それを書き写している人たちの中には、これはイザヤ書第 53 章に語られている通りのことなのだと信じて、もしかするとそのイザヤ書の言葉を書き込んだのかもしれませんが。いずれにしても、十字架の出来事は、聖書にもう書いてあったことなのだということが、繰り返し繰り返し、よみがえってきた。そして、ペトロやパウロがイエスさまのことを語るようになった時に強調したことは、「聖書に書いてあるとおり」イエスは十字架につき、「聖書に書いてあるとおり」甦られたということです。

不思議なことにマルコ福音書は十字架について実際の様子をほとんど記しません。十字架刑がどんなに残酷な惨い刑であるかを書くことはしませんでした。けれど、別の面でこの十字架刑が、どれだけ残酷であったかを書き記しています。この場合の残酷さは、身体の痛みの残酷さではなくて、人々の心の残酷さが生んだ痛みです。周りにいた人々は、皆イエスを罵っ

た。侮辱した。他人は救ったのに自分は救えない。イエスの救いのみわざ、奇跡は信じてやってもいい。だが、自分を救っていないではないか。そう言って嘲った。十字架につけられた者も、そう言ってイエスを罵った。嘲りの中でイエスさまは死なれた。ここにもまた、詩編第 22 篇 7 節の言葉、「わたしは虫けら」という言葉が、痛いほど聞こえてきます。主イエスは、虫けらのように軽んじられて死なれたのです。

どんなふうにも嘲ったのか。それは、あなたが十字架から降りるならば、それをこの目で見たら、信じてやってもいいということだと思います。言い換えれば、お前を救うこともできない神さまなんて、どんな神さまだ。それでも神さまだと言えるのか。救うことができない神さまはお前を見捨てたのだ、もしお前を捨てない神さまなら認めてやってもいいぞ、とっているのです。身体の残酷さよりも、このようにイエスを侮辱した残酷さの方が、よほど恐ろしいのであり、マルコによる福音書が書きたかったことはこれだと思います。

だがそこで、主イエスは耐えられた。そこで耐えて、全く別の響きで、信頼に満ちた、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という絶望の叫びをあげられました。シモンは、この叫びを、自分が担いで組まれた十字架につけられたイエスの叫びとして聞いて、どのように思ったのでしょうか。イエスさまが負われた十字架の重みというのは、自分の方が実際に感じた重みよりも、もっともっと、深い重いものを意味していたのだということを、やがて知るようになったはずです。人々はイエスを嘲って、メシア、イスラエルの王、そんなにいばるのなら、さっさと降りてみたらいいと言って、そしてローマの権力は、からかい半分に「ユダヤ人の王」という罪状書きを、そのそばに置きました。すべて、からかいの言葉でしかありません。けれど、シモンを初めとする人たちにとっては、これが真実の響きを持つようになりました。本当に、イエスさまは王であられる、わたしたちの主だ。そう知ったのです。下から十字架の重みを、しっかりと担うことによって、わたしたちを救い上げて下さる、救い取ってくださる、救い続け

てくださる真実の王なのだと知ります。

このシモン、その息子たち、それを囲む人たちがこのイエスさまの十字架についての物語を語り、それを聞いて喜びながら神を讃美した日々をわたしたちもまた思い出すことができます。そして今わたしたちも、その信仰の歴史の一端を担うことができること、その歴史の中にあることを、心から感謝します。わたしたちも喜んで、主の十字架を仰ぎ、その主の十字架を担って従う者とならせてくださいと願います。祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま、ためらいがあり、不信仰があり、疑いがわたしたちの歩みを妨げるとき、どうか聖霊を注いでください。主イエスのお姿とみ声とをはっきりと聞き取ることができるよう導いてください。押し流されないよう、聞いたことにいっそう注意を払う者とさせてください。十字架の出来事を外から眺めるのではなくて、十字架を通過して、その中に立つことができますように。すでにそこに立たされて

いることを、感謝して受け入れることができますように。わたしたちひとりひとりにとって、わたしの神になってくださるあなたを、どうか変わることなく信じ抜くことができますよう願ひて下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

讃美歌 讃美歌 21-300-3 (十字架のかげに)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>